

【小 論 文】

【出題趣旨】

1941年に開始された太平洋戦争は、その発端となった日本による真珠湾攻撃が相当な成果をあげたことなどにより、国民の間には好戦気運が高まり、文学者たちの多くも一斉に戦争賛美の方向に舵を切った。小林秀雄は当時から日本を代表する評論家であったが、彼もこの方向に一応は従いつつ、単に戦争を賛美するだけではなく、それを人生のあり方にひきつけて論じ、戦争と平和は同じものだという独特の考えを披歴している。本問は、こうした小林秀雄の考え方を示す代表的な論考を素材として、太平洋戦争に関する最も基本的な知識を確認し（設問1）、戦争と人生をオーバーラップさせる小林の発想を適切に読みとれているかを問い（設問2）、併せて小林のそのような発想に対し、自分なりの評価と見解を論じさせる（設問3）ものである。

本問は、太平洋戦争という、日本の歴史の分岐点となった出来事につき、知識の正確さや当時の社会における論調に対する論理的な評価を示しうることで、正確な事実認識と論理的で説得力ある見解の提示という、法曹に求められる基本的な資質につながるという認識に依っている。

【採点基準】

採点に当たっては、論述としての統一性や整合性を前提として、

- ・日本が、外交交渉の行き詰まりにより開戦の決定をした経緯や、太平洋戦争の開戦にあたって真珠湾を奇襲攻撃し、それが大戦果をあげたと理解されていたことなどの基本的知識が備わっているか否か
- ・小林秀雄の独特の論理展開をどこまで適切にフォローし、頭の中で要約できているか
- ・戦争が起こるのは人生そのものが戦いだからである、という一読してエキセントリックな主張を、感情的にはなく小林秀雄の論理に即して理解できているか
- ・著者の考えに対して論理的なコメントができているかなどを評価の基準とする。

以 上